

アプレンティスシップ、悲喜こもごも

＜実務の世界に入る＞

水上 龍郎

うやむやな大学生活に訣別して丹田の精気を抜いているうちに、ふと気がつく、曇天に舞う糸の切れた凧のようになっていた。この時期、およそ2年間を超える。

良かれ悪しかれ今は深くかかわっている語学という視点から見ると、文字どおり＜英語離れ＞のブランク時代だった。トルストイ、ドストエフスキー、チェホフなどのロシア文学をむさぼり読み、その一方でジッドの小説から紀行記まで手当たり次第に読んだ。もちろん全部翻訳物である。

どうしてこんなことになったかという、このころ自称他称＜文学青年＞と呼ばれる新しい友人群を得たからである。この人たちとは、中央線の荻窪から吉祥寺あたりに点在するトリスパ―やニッカバーで初めて知り合った。彼らは週に3日程度、夜のとばりがおきるころになると、どこからともなく集まってきて、一緒に飲み、ことばを交わした。私学に通う某著名作家の息子、海兵帰りの硬ぶつ、医学部のインターン、まもなく国立大の助教授になるという歴史研究家など若い群像であったが、そのほかに、学生でも社会人でもない、たとえば私のような何をしているかわからない人たちがいて、この無類漢みたいなのが一番多かったようだ。

たばこの煙にむせながら、文学、哲学、科学などを中心話題にして談論風発、侃々諤々、それに話柄の片鱗に恋物語の虚々実々をからませてわいわいがやがや、だれも宵のうちに退散する気がなく、たいていは当たり前のごとく、朝帰りになった。

それはそれで、けっこう楽しく、時に梁山泊の英雄のような錯覚に陥っていたのだが、現実の世界で先立つものは何としても金である。当然のことながら、生きていくために必要な最低限の衣食住費をかせがなければならない。それにも増して(?)、一般的にはきわめて生産性が低いにもかかわらず、その悪習に染まってしまったために、酒場にかかなりの高額を支払わなければならない。

そこで私は、収入源を中高校生に英数国を指導する家庭教師業にたよることにした。目的は崇高ではなかったが、私は少しでも多くの金を得るために、家庭教師の件数も増やし、無理を承知で週6日間をこれにあてたのである。のみならず、浪人を含めて数人の生徒を対象に、1日3家庭、いわばトリプルヘッダーという強引なスケジュールを組んだ。午前中から午後の6時ころまで、半径5kmくらいの領域を徒歩とバスと電車を乗り継ぎ、精力的に駆け回った。

ところで、この家庭教師業の部分で、英語離れのブランク期間をわずかに埋める語学との接点が確かにあった。指導科目の中に受験英語があったからである。この英語の授業は、一方では義務的に処理したが、他方では何となく重荷だった。ある程度学び覚えた英語の生かし方に努力不足があることを常日ごろ恥じていたかであろう。

こんなことを続けていたら、大学で英語を専攻し、将来これを生かして何かをしなければならぬ青年としては、いかにも情けない図柄だ――そうはっきり悟り始めたのが昭和32年(1957年)、鳳の糸が切れてから実に2年半かかったことになる。そのとき、私の年齢はすでに四半世紀分にも達していた。

1957年7月の初めに家庭教師の仕事ですべて退いた。経済的には背水の陣を布いたのである。生意気にも英語を使う社会人になるというのが目標だった。しかし、実社会の流れにうとい井の中の蛙では何から始めてよいか、手がかりがつかめぬ。(このころ、大学出の現役就職でも決して容易ではなかったようだ。)

そこで、高校の同級生で、横浜の大学を出てから東京のある財団法人に勤めている友人に相談した。彼はこの厄介な頼みを無にできなかった。8月に入ってまもなく、英語に関係する2つの会社が翻訳者を中途採用するという新聞広告の切り抜きを同封して、ぜひ受験してみたら、と薦めてきた。

そのひとつは当時、今をときめくリーダーズダイジェスト日本支社、ふたつはTという名称の小規模通信社(ただし、出版系)である。

受験の結果、リーダーズは筆記試験を通過して面接まで来た段階で、そのビルの大層さ(皇居の外堀に面して建っていた)、和洋試験委員たちの紳士淑女ぶり、さらには高級な机といすが余裕たっぷりな点在している貴賓室のような翻訳現場の雰囲気は圧倒され、途中でしっぽを巻いて逃げ出してしまった。要するに、ヘテロの生活に身をくずした信州の山猿には水が合わなかったのである。

T通信社の方はリーダーズとは大違い、古めかしい建物の狭い一室に社長以下50有余人もの男女がいるようなところだった。筆記試験は、たまたま欠勤していただれかの席に座らせられ、国際情勢に関する英語論文の和訳400ワードくらいと、テレビ技術の一部を解説した和文600字程度の英訳にトライした。電気に関する専門語は日本語でも未知のものが多く、いわんや英語にするとするのは不可能に近かったため、全体として穴ぼこだらけの答案であったが、どこかに採点者を納得させる何かがあったらしく、2/40の確率で合格した。

面接試験は部屋のコーナーに邪魔物のように設けてある応接スペースで行われた。しばしも鳴りやまない電話のベル音と受け答えする人声と戦いながら、何とか面接を終えたときは、扇風機のすぐわきに寄せてもらい、流れる汗を一心に吹きとばして息をついたように覚えている。

私は、このとき当面の身辺事情が切迫しており、それが主たるモチベーションであったにはちがいないが、これ

からの生き方を決める上でも、こういう会社で働かせてもらいたいと思った。周波数がぴったり合った、とも言える。幸いなことに、＜採用決定、明日入社されたし＞という文面の電報が8月14日に届き、かくして私の初のサラリーマン生活は、翌15日の終戦記念日に始まった。

T通信社では、海外部職員として配置され、主として2種類の月刊英文雑誌＜"ASIAN TRADE"および"RADIO & TV"(後に、ELECTROと改名)＞のトランスレーションに従事する仕事を与えられた。

雑誌の内容は、両誌とも、国際交易記事と技術記事が相半ばしており、各月の巻頭記事は、かならずと言っていいほど通産省の役人や総合商社/主流メーカーの部長級が書いたものである。ということは、郵便扱いこそ第3種とはいっても、広告がかなり多い業界誌の色彩が濃厚な出版物だった。

社内翻訳作業は、重要記事を海外部長と副部長が英訳し、その他の雑稿を私も一員である常駐日本人スタッフ3名が英文化した。部長はアメリカ生活が長かった人で、自ら英文記事を直接書きおこすことが間々あった。ほかにパートタイマーの資格でアメリカ人3人が詰めていたが、彼らは主として社内外で制作される英文のチェックとリライトを担当した。

社長のW氏は、日大の哲学科を出た中老の童顔紳士で、中央公論社の編集員を勤めたのち、この会社をつくったという。戦時中は少佐待遇の報道班員

として南方戦線を駆けめぐっていた体験をもち、どちらかという仕事はやりやりこなすやり手だった。いきおい社員もこれにならい、みんな働き者である。深夜におよぶ作業や会議に泣き言をもらす者はだれもいなかった。

甲信の国境をなす八つが岳の北側がW社長の出身地、南側が私の生まれ故郷ということもあってか、彼は私にことさら目をかけてくれた。

何がきっかけだったか思い出さないが、妙な師弟愛が生まれて1週間に1度ずつノートを交換する習慣が生まれた。はじめは、私が職務上の問題点とその解決策を中心に思いつくままを報告し、それに対して社長が感想を書いたり採用是非を指示するというものだったが、だんだん内容がエスカレートして、しまいには紙上人生論を展開するようになった。

彼は当時、教育評論家として名をなしていたし、なにしろ出自がかの＜中公＞編集部なのだから、当然文章がうまい。私は、思わぬ文章修行をさせていただいたわけで、月曜日の朝机の上にノートが戻っていると、むさぼるように彼の筆跡を追った。

ある時、翻訳の仕事をするにはまわりがあまりにもうるさすぎる、環境をととのえていただけませんか、と愚痴をこぼしたところ、電話や他人の話し声が気になるようでは第一線で活躍する＜ブンヤ＞(彼はこのとき、＜聞屋＞でなく＜文屋＞と説明した)としては一人前じゃない、真剣に取り組めば周囲の音は聞こえないよ、とたしなめられた。この諫言は後々まで私の心に残る。

今では、組織のみならず、家庭で翻訳をしても、まわりを無視できる。静寂の中ではかえって落ち着かず、多少の騒音がないと仕事がスムーズに進まないほどだ。

翻訳の対象になる和文原稿の数量は、1誌につき毎月200枚(400字詰め)ぐらいだった。当月の分は、ぎりぎり2ヶ月前までに入稿するのが建前になっており、編集部のチェックを受けて海外部に回されてくると、私たち翻訳員は手分けして直ちに翻訳作業にかかるのがルールだった。

ハードツールはレミントンかアンダーウッドの標準型手動タイプライターである。それもかなりくたびれていて、キートップのアルファベット文字は随所にすり切れているものがある、ほとんど判別できなかった。

ラインフィード時のキャリッジ操作音と打鍵音はよくひびいたが、翻訳者は言葉を考えている時間が長く、タイピストのように間断なくカタカタ打つわけではないので、騒音問題を起こすことはなかった。

また、正規のタイピング教習を受けてない私などは、たとえ打鍵数は少なくとも不当に力が入るためか、何時間も従事していると指先と手首に痛みが走って、作業の一時中断を余儀なくされることが多かった。

翻訳のプロセスを物理面で分析すると、当時の手動タイプライターは現在のパソコンに比べて手間も時間もずいぶんかかったが、前者に寄せる私の思いは熱い。手動機のもつ効率は、人間の頭脳がデータを入力して情報を出力するスピードにふさわしいと信じてい

るからである。

さて、私たちが翻訳した草稿は、語句や文章の訂正を示す“X”のべた打ち(XXX...)をあちこちに残したまま、チェッカーに渡される。チェックを受けた訳文、場合によってはリライトされた英文は、訳者にフィードバックされ、ここで訳者による内容確認が行われたのち、海外部長の承認をとり、編集部に戻される。

当初、私のたたき出した原稿は当然のことながら3人のアメリカ人の手によって朱に染まり、ほとんど原形をとどめず、といった風情であった。しかし、日を重ねるにつれチェック箇所が目に見えて少なくなり、いつこの仕事から追い出されるかという私自身の悩みは消えていくかのようにであった。私は大いに気をよくした。

北大からハーバード大で韓国語を専攻した部長も、かならず自分の英文をアメリカ人にチェックさせていた。私には、彼の原稿に入る朱の量はいつまでたっても同じ比率で、しかも私と比較して相対的にやや多めであるようにも見えた。

ある日、居酒屋で一杯やりながら部長は私に論じた---アメリカ人は日本語の原文と突き合わせて英文を読んでいるわけではないから、訳者が何を書いても内容のチェックは不可能だ。君のはどちらかというと優等生の英作文になっている。英文の形はととのっているから直しようがない。チェッカーのために英語を書いているなどと思うな。原文の主張する考え方をこんな英語でしか表現できないが、この苦心を察してくれないか、という気概をもつべき

だろう。ここに思う存分アカを入れてほしい、とチェッカーに要求する姿勢が大切だ。

これは痛かった。私は以後、部長に頭が上がらなくなる。作品は再び真っ赤に染まるようになった。だが、このアカは私の求めるアカであり、徒弟時代の修行としては、ほんものの戦いが始まったのである。チェックの数におびえ、チェックの内容に迫ることができなかった私にとって、これは貴重なカタルシス体験だった。

在職中、社内翻訳に加えて、外部ソースからの翻訳依頼も多数あった。社長も部長も自由裁量の持ち主で、会社の仕事に支障のない限り、何にでも挑戦して翻訳の〈こころ〉とスキルをみがくべきだ、という考え方である。

入社2年目のころ、商社経由であるテレビ番組---当時は、もちろん白黒画面---のナレーションを翻訳した。ソビエトの大統領フルシチョフが初めてアメリカの土を踏んだときのドキュメンタリーで、“Khrushchov in Texas”と題し、30分物3本で構成されていた。

全体は、テキサスを舞台として、レポーターと大統領、あるいはレポーターと地元民とが交わす会話である。私は、こういった素材の翻訳はずぶの素人だった。

スクリプト未着のまま、商社の映写室で3回にわたり、大スクリーンに展開される絵を見ながら早口の会話を聴いたが、ほとんど理解できない。予定期日になってもアメリカからスクリプトが届かず、ついに見切り発車で私の翻訳作業が始まった。

画面の記憶を頼りに、重厚なテーブ

デッキから流れる音声のみで訳文をつくろうという大冒険である。しかも、セリフ独特の制限が多々ある。わがアメリカ人の応援を得ても、農民の話す言葉はよく聞き取れず、至るところで暗礁に乗り上げた。とくに老人のしゃべりはお手上げで、適当につくろって辻褃を合わせるのが精一杯だった。翻訳を終えて規定の翻訳料をいただいたが、良心の呵責に堪えなかった。

この番組は、その年の師走も末になって、夜の11時から3週にわたって放映された。テレビはまだ金持ちの独占物だったし、もちろん私が持っているはずもないので、行きつけの喫茶バーに頼み込み、特別にチャンネルの切り替えを願って、おそろおそろ見た。すでに吹き替えの技術が定着していて、著名な声優たちがごく自然体でおおらかにしゃべっていたが、それぞれのセリフが各シーンをみごとに盛り立てていた。とても自分の訳文とは思えないほど巧妙な吹き替えに、私はすっかり驚き、感に入った。

その後、私はこの種の翻訳を手がけることはなかった。素質的に無理があると悟ったからだが、この自覚は今でも正解と思っている。

1962年に就航した日本の中型旅客機YS-11の英文化チームに参加したのも、この会社の好意によるものである。仕事は長期におよび、ほぼ2年間会社の空き時間と日曜日などの休日を利用して根気よく続けた。私の担当部分は着陸装置(landing gear)で、航空自衛隊の特殊な用語集と首っ引きでタイプをたたいた。図面を見ながら部品や各部の説明を丹念に英訳し、脚全体の構造

と動作原理を把握していく作業はたいへん興味深かった。後年、自分で翻訳会社を興してから、Caterpillar Tractor社の土工機 (earth-moving equipment) や Boeing 社の新鋭船ジェットフォイル (Jet Foil) など機械関係の大型プロジェクトに取り組んだが、YS-II の経験は大きかった。作品のフィードバックが頻繁に行われ、国内外の専門家に呼びつけられて叱られたことも良い勉強になった。まだ、テクニカルライティング手法などはまったく未知の状況の中で、簡潔で分かりやすい英語を書くことがいかに重要であるか、またそれが英語の基本に徹してこそ初めて到達できるレベルであることも知った。

日本とヨーロッパの一流製薬会社が組んだ合弁企業から臨床レポートの英訳を頼まれたこともある。この作業は日程的にきつく、会社の許しを得て私と私の同僚ひとりが、神田の旅館で4日間ほど缶詰めになった。私たちは、それまでに実務で得られた最高の翻訳技術を駆使して徹夜もいとわず作業を進めた。

ところが、先方の責任者が融通のきかない英語の生かじり族で、四六時中眉間にしわを寄せ英訳にケチをつける。たとえば、彼の頭の中には、いわゆる無生物主語という英語独特の簡潔表現が欠けているらしく、そのように書かれた英文はすべて書き直せという具合である。私たちは、理不尽を承知でしぶしぶながらその要求に従った。泣く子と地頭とクライアントには勝てないということを知ってはいたが、この作業は何とも後味の悪い体験だった。

広告の校正に立ち会って、取り返しのつかない失敗をしたことがある。それは有名な京都の科学器械メーカーの裏表紙広告で社名の綴りを間違えたまま印刷してしまったという事件である。会社の固有名詞部分<SHIMADZU>を<SHIMAZU>と綴って"D"を落としただけのミスだが、広告収入をゼロにする結果になったのだから、これは会社にとって致命傷だった。営業部の担当者に散々いや味を言われ、以後私たち翻訳関係者は編集部の領域に口を出すことを慎んだ。

その他、この宮仕えを通じて仕込まれたものは数知れない。実務における翻訳とは何かを徹底的に教育されたし、また上司や同僚との付き合いの中で、人生の哀歓や機微にもふれることができた。一通りではない厳しさもあったが、人を上手に育てる環境に恵まれたということだろう。

1964年、トランジスターラジオの輸出に沸いた日本の景気も一段落し、国際交易の促進に貢献した英文雑誌も色あせてきたかのようなのである。今日で言うリストラの波をかぶって海外部も縮小となり、同僚の数が減った。私は、社長と相談の上、自分の才覚で翻訳事業を創始し、これをライフワークにするという構想をたて、同年4月に会社を退いた。悲壯感はなく、むしろビジョンにあふれた男の出航であると、あえて胸にたたみ込んだ。

ほんとうは、この時から私の苦難が始まるのだが、若さはすべての陰影を消してくれる。精神的にも物質的にも地獄に落ち、また地獄からは上がる、その生きざまはできれば次号に。

(OSTECジャーナル 第8号 1999年11月)